静岡市美術館　PRESS RELEASE

ムンク、ガッレン=カッレラ、キッテルセン…世紀末に活躍した北欧の画家たち

The Magic North

ART from Norway, Sweden and Finland

北欧の神秘

ノルウェー・スウェーデン・フィンランドの絵画

【プレスリリースのお問い合わせ】　展覧会担当：伊藤　　広報担当：岡田・大庭

静岡市美術館
SHIZUOKA CITY MUSEUM of ART

〒420-0852 静岡市葵区紺屋町17-1葵タワー3F
tel. 054-273-1515（代表）　www.shizubi.jp

北欧の神秘

ノルウェー・スウェーデン・フィンランドの絵画

19 世紀以降、北欧では独自の芸術が開花します。それまでフランスやドイツの美術を範に取っていた画家たちは、自国の風土や文化、歴史に関心を寄せるようになり、氷河と森が織りなす固有の風景や、古くから伝わる神話・民間伝承が、絵画主題として人気を博しました。とくに世紀転換期の 1900 年頃は北欧美術の「黄金期」と呼ばれ、ノルウェーのエドヴァルド・ムンクやフィンランドのガッレン = カッレラなど、後に西洋美術史に名を連ねる画家たちが活躍しました。

本展は、日本では目にすることの少ないノルウェー、スウェーデン、フィンランドの絵画が一堂に会する貴重な機会です。ノルウェー国立美術館、スウェーデン国立美術館、フィンランド国立アテネウム美術館が所蔵する 47 作家、約 70 点の作品を通して、「自然」「神話・お伽話」「都市」というテーマを軸に、19 世紀後半から 20 世紀前半に描かれた北欧絵画の魅力をひも解きます。北欧の画家たちが紡ぎ出す神秘的な絵画世界をぜひお楽しみください。

会期：2025 年 2 月 1 日（土）－3 月 26 日（水）

■休館日：毎週月曜日、2 月 25 日（火）　※ただし 2 月 24 日（月・祝）、3 月 24 日（月）は開館。
■開館時間：10:00－19:00（展示室入場は閉館の 30 分前まで）
■観覧料：一般　1,400（1,200）円、大高生・70 歳以上　1,000（800）円、中学生以下無料
　　お得な一般前売ペアチケット 2 枚 1 組　2,200 円
　＊（　）内は前売および当日に限り 20 名以上の団体料金
　＊障がい者手帳等をご持参の方および必要な付添の方原則 1 名は無料
■前売券・前売ペアチケット／ 12 月 13 日（金）から 1 月 31 日（金）まで販売
■主催等
　主催：静岡市、静岡市美術館　指定管理者（公財）静岡市文化振興財団、Daiichi-TV
　協賛：DNP 大日本印刷
　特別協力：スウェーデン国立美術館、フィンランド国立アテネウム美術館、ノルウェー国立美術館
　協力：フィンエアー、フィンエアカーゴ
　後援：静岡市教育委員会（予定）、スウェーデン大使館、フィンランド大使館、ノルウェー大使館
　制作協力：NHK プロモーション
　企画協力：S2

みどころ

1．北欧絵画史を総覧できる展覧会

日本では目にする機会の少ない北欧絵画。本展はノルウェー、スウェーデン、フィンランドから 47 作家 70 点の作品が一堂に集う貴重な機会です。

2．エドヴァルド・ムンクの作品、2 点来日。

美術に馴染みがない人も一度は名前を聞いたことがある近代美術の巨匠、エドヴァルド・ムンク。本展ではムンクが描いた《フィヨルドの冬》と《ベランダにて》を展示します。

3．北欧の神秘的な世界観に浸る

森の怪物トロルをはじめ、北欧の神話や民話に出てくる妖精や怪物は、今日でも映画や小説の着想源になっています。絵画に描かれた北欧ファンタジーの世界をぜひお楽しみください。

序章　神秘の源泉 ― 北欧美術の形成

19 世紀、北欧の画家たちはナショナリズムや民族主義の高まりを背景に、独自の芸術を確立する道を模索し、自国に固有の自然や神話、民間伝承に画題を求めるようになります。以後、北欧美術は国内への関心と国際的な美術動向が複雑に絡み合いながら展開していきました。

とくにこの時期、大きく発展を遂げたのが風景画ジャンルです。18 世紀末ごろからイギリス、フランス、ドイツで隆盛したロマン主義では、感性や個性に依拠した表現が好まれ、恐怖や畏敬の念の対象となる自然は、画家たちの重要な着想源になりました。壮大で荒々しい北欧の自然はこうしたロマン主義の精神とうまく調和し、優れた風景画家たちを輩出することになります。

序章では 1830 年代から 1880 年代の作品を紹介し、北欧美術の神秘の源泉にせまります。

ヨーハン・クリスティアン・ダール《山岳風景、ノルウェー》1848 年
油彩・カンヴァス　スウェーデン国立美術館　Photo: Erik Cornelius / Nationalmuseum

クリスティアン・ダール

「ノルウェー絵画の父」と称されるクリスティアン・ダール。ドイツのドレスデンで学び、ロマン主義のカスパー・ダーヴィト・フリードリヒと親交があったことでも知られる。ドレスデンの展覧会に出品された本作は、ノルウェーの山岳風景を捉えたものとされ、小さく描かれた人々の営みと対照を成す、雄大な自然描写がひときわ目を引く。

ロマン主義画家が描く壮大な自然

マルクス・ラーション

スウェーデンを代表するロマン主義の画家。本作でラーションは、暗雲が立ち込める空の下、岩山の間を滝が轟々と流れ落ちる様子を迫真的に描いている。荘厳かつ崇高な自然描写を好んだ、ロマン主義的な趣向をよく表す一点。

マルクス・ラーション《滝のある岩場の景観》1859 年
油彩・カンヴァス　スウェーデン国立美術館　Photo: Nationalmuseum

北欧神秘の世界

アウグスト・マルムストゥルム《踊る妖精たち》1866 年
油彩・カンヴァス　スウェーデン国立美術館
Photo: Cecilia Heisser / Nationalmuseum

湖上を舞う妖精たち

月明りに照らされた湖の上を、淡い霧のようにも見える妖精たちが手を取り合い、円舞している。北欧神話や民間伝承の世界観を想起させる夢幻的な光景である。スウェーデンの画家マルムストゥルムによる本作は、スウェーデン国王カール 15 世によって買い上げられ、1866 年のストックホルム万国博覧会に出品された。

天地創造の神、イルマタル

フィンランドの民族叙事詩『カレワラ』で語られる天地創造の場面。大気の女神イルマタルは海に降り立ち、風に吹かれたことで、後の英雄ヴァイナモイネンを身ごもるが、その後 700 年もの間、子を宿したまま海の上をさまよっていた。そうしているうちに、一羽の鴨がイルマタルの膝に巣を作り、卵を生んだ。彼女が足を動かすと、卵が海の中に落ち、割れた卵の殻が大地、空、太陽、星になったという。

ロベルト・ヴィルヘルム・エークマン《イルマタル》1860 年
油彩・カンヴァスに貼った紙　フィンランド国立アテネウム美術館
Photo: Finlands Nationalgalleri / Hannu Aaltonen

1章　自然の力

都市化や工業化が進展した19世紀末、ヨーロッパでは自然に囲まれた暮らしや前近代的な生活様式への憧れが人々の間で芽生えました。こうした自然回帰の志向は、人間の内面世界の表現を主眼に据えた象徴主義の潮流とともに北欧にもたらされ、自然は画家自身の情緒や感情を投影した主観的なイメージとして表されるようになります。そしてこの象徴主義的な芸術観は、その土地固有の自然風景の絵画化を促すナショナリズムの動向と結びつき、ナショナル・ロマンティシズムと呼ばれる潮流を形成していきました。

本章ではフランス象徴主義の画家ポール・ゴーギャンから影響を受けたスウェーデンやフィンランドの画家たちのほか、夏の白夜から着想を得た叙情的な風景表現で知られるノルウェーの「フレスクム農園」の一派、そしてフランスとドイツで研鑽を積んだ後にノルウェーの国民的画家となったエドヴァルド・ムンクらの作品を紹介します。

ヘルメル・オッスルンド《カッルシューン湖周辺の夏の夜》
制作年不詳　油彩・カンヴァス　スウェーデン国立美術館
Photo: Cecilia Heisser / Nationalmuseum

総合主義の継承者、ヘルメル・オッスルンド

パリでゴーギャンに師事したオッスルンドは、帰国後、スウェーデン最北部の山岳風景を好んで描いた。本作ではノルウェーとの国境沿いにあるカッルシューン湖近隣の光景が取り上げられ、黒い輪郭線と明快な色調、平面的な形態表現を特徴とするゴーギャンの総合主義からの影響が色濃く現れている。オッスルンドは日本の浮世絵にも強い関心を抱いていたことが知られる。

ヴァールバリ派の奇才、ニルス・クレーゲル

1890年代にスウェーデンの西海岸で結成されたヴァールバリ派は、ゴーギャンの絵画様式を取り入れ、スウェーデンらしい自然景観を描いた、ナショナル・ロマンティシズムを代表する一派である。クレーゲルもその一員であり、彼はまたフィンセント・ファン・ゴッホからも影響を受けた。

本作には特定の絵画様式からの影響は見られないものの、画家自身の感情を映し出したかのように見える表現力豊かな植物の描写には、ゴッホ作品との共通性が見出せるかもしれない。

ニルス・クレーゲル《春の夜》1896年　油彩・パネル
スウェーデン国立美術館
Photo: Erik Cornelius / Nationalmuseum

フレスクムの画家 アイリフ・ペッテシェン

1886 年、ノルウェーの画家クリスティアン・スクレスヴィーグは、自身が所有するクリスティアニア（現オスロ）郊外のフレスクム農園に、ペッテシェンを含む 6 人の画家を招待する。彼らはそこで夏の白夜から着想を得て、神秘的な光と大気に包まれた叙情的な風景画を描いた。「フレスクムの画家」によるこの種の風景画の確立は、ノルウェー絵画史における写実主義から象徴主義への転換、あるいは「ノルウェー新ロマン主義」時代の幕開けとして位置づけられている。その翌年に描かれた本作は、画中にニンフ（女性の妖精）を含み、非現実の要素がよりいっそう強調されている。

アイリフ・ペッテシェン《夜景画》1887 年　油彩・カンヴァス
ノルウェー国立美術館　Photo: Nasjonalmuseet/Børre Høstland

エドヴァルド・ムンクと ノルウェーの大自然

ノルウェーの前衛芸術家集団「クリスティアニア・ボヘミアン」に属した後、パリとベルリンへと活動の場を広げたムンク。その一方で彼は母国ノルウェーの風景も繰り返し描いた。フィヨルドとは氷河の浸食によってできた入り組んだ湾のことで、ムンクの代表作《叫び》（1896 年、ノルウェー国立美術館蔵）の背景にも描かれている。不安や苦悩を投影した《叫び》のフィヨルドとは対照的に、本作では静ひつで穏やかな自然描写が際立っている。

エドヴァルド・ムンク《フィヨルドの冬》1915 年
油彩・カンヴァス　ノルウェー国立美術館
Photo: Nasjonalmuseet/Børre Høstland

身近な自然を装飾的に描く ニコライ・アストルプ

アストルプはノルウェーの美術学校で学んだ後、フランスやドイツに渡り、スイス象徴主義のアルノルト・ベックリンやフランスのナビ派の画家モーリス・ドニらから影響を受けた。
本作の舞台となったユルステルは、画家が生涯の大半を過ごした村である。アストルプは妻が自邸の菜園で収穫に励む様子を、鮮やかな色彩で装飾的に描き出している。

ニコライ・アストルプ《ユルステルの春の夜》1926 年
油彩・カンヴァス　ノルウェー国立美術館
Photo: Nasjonalmuseet/Frode Larsen

2章 魔力の宿る森 ― 北欧美術における英雄と妖精

北欧には様々な神話や伝説が残されていますが、そのなかでも重要な位置を占めているのが「北欧神話」と『カレワラ』です。「北欧神話」とは、キリスト教化以前にゲルマン人の間で信奉されていた神々や英雄にまつわる物語のうち、ノルウェー、スウェーデン、デンマーク、アイスランド等に伝承されたものを指します。また『カレワラ』は古くから伝わるフィンランドの口承詩を、19 世紀前半に物語として編纂した民族的叙事詩のことです。これらの古典文学や民間伝承、おとぎ話は、画家たちに大きなインスピレーションを与えました。

『カレワラ』に取材したヨセフ・アラネンのテンペラ画や、「北欧神話」の妖精を主題とするアーンシュト・ヨーセフソンの作品、ノルウェー民話から着想を得たテオドール・キッテルセンの連作を通して、北欧の神秘的な物語世界をご覧いただきます。

「カレワラ」を彩る 個性豊かな登場人物

物語の主要人物であるレンミンカイネンは、男前で性格が荒々しく、女癖の悪い青年であった。彼はポポヨラ（伝説上の地名）でひとりの娘に求婚するが、その母親から彼女が出す難題に成功すれば結婚を認めるという条件を提示される。それに応じたレンミンカイネンは、死の国で白鳥を一矢で撃つという難題に挑戦するが、その最中に彼自身が盲目の牛飼いによって矢で撃たれ、命を落とす。

ヨセフ・アラネン《レンミンカイネンと牛飼い》1919-20 年
テンペラ・カンヴァス　フィンランド国立アテネウム美術館
Photo: Finlands Nationalgalleri / Jenni Nurminen

北欧神話の妖精、ネッケン

北欧の神話や民話に登場する水の精ネッケンは、ヴァイオリンの音色や美しい歌声で人々を誘惑し、水中へと引きずり込むエピソードで知られる。本作はスウェーデンの画家ヨーセフソンの代表作で、ネッケンが水辺でヴァイオリンをひく様子が描かれている。

アーンシュト・ヨーセフソン《水の精》1882 年
油彩・カンヴァス　スウェーデン国立美術館
Photo: Anna Danielsson / Nationalmuseum

ガーラル・ムンテ《帰還するオースムンと姫》1902-1904 年
油彩・カンヴァス　ノルウェー国立美術館
Photo: Nasjonalmuseet / Jacques Lathion

中世の英雄譚 姫を救い出すオースムン

「名誉を得し者オースムン」は、中世の北欧に起源をもつバラッド（物語的な民謡）のひとつ。ノルウェーの画家ムンテによる本作では、主人公のオースムンが、トロルに囚われていた姫を救い出す場面が表されている。

キッテルセンと ノルウェー民話

森の怪物トロルなど架空の生物の表現を得意としたキッテルセン。彼はノルウェーの民話『ソリア・モリア城』から着想を得て、1900 年に 12 点から成る油彩画連作を制作（本展では 3 点を展示）する。さらに 1911 年には自ら翻案したテキストと挿絵を寄せて、絵本「ソリア・モリア城—アスケラッドの冒険」を出版した。

物語のあらすじは少年アスケラッドが黄金の城を目指して冒険に出るというもので、キッテルセンは主人公が道中で出会う妖精や怪物を想像力豊かに生き生きと描き出している。

テオドール・キッテルセン《トロルのシラミ取りをする姫》1900 年
油彩・カンヴァス　ノルウェー国立美術館
Photo: Nasjonalmuseet/Børre Høstland

3 章　都市 ― 現実世界を描く

産業革命以降、近代化が進展した北欧では、都市景観やそこに暮らす人々も主要な絵画主題となりました。その背景にあったのが、19 世紀後半にフランスからもたらされたレアリスムや印象主義からの影響です。これらの画派においては、身近なモチーフをありのままに描くことが重視され、画家たちを取り巻く都市の情景にもおのずから関心が寄せられるようになりました。一方、こうした写実表現を好んだ画家の中には、都市化や近代化に脅かされる農村の暮らしや伝統文化に眼差しを向ける画家たちもいました。

その後、世紀転換期に象徴主義やナショナル・ロマンティシズムが勃興すると、写実性を離れた叙情的な都市景観画が盛んに描かれるようになります。とくにスウェーデンでは、幻想性をまとった夜や明け方の都市の情景が好んで取り上げられました。こうして都市という近代のモチーフを題材にしながら、新たな神秘性の表現が開拓されていったのです。

北欧レアリスムの代表画家 クリスティアン・クローグ

ノルウェーの前衛芸術家集団「クリスティアニア・ボヘミアン」に属したクローグは、ムンクに絵の指導を行ったことでも知られる。本作は大画面作品《生存のための闘争》（ノルウェー国立美術館蔵）のための部分習作で、首都クリスティアニア（現オスロ）を舞台に、パン屋からの施しに群がる人々の様子が表される。都市の貧困という近代化の負の側面を捉えたレアリスム画家らしい作品である。

クリスティアン・クローグ
《生存のための闘争（ノルウェー国立美術館収蔵作品のための部分習作）》
制作年不詳　油彩・カンヴァス
スウェーデン国立美術館
Photo: Anna Danielsson / Nationalmuseum

カール・ノードストゥルム《スカンセンからのストックホルムの眺め》1889 年
油彩・カンヴァス　スウェーデン国立美術館
Photo: Erik Cornelius / Nationalmuseum

印象主義から影響を受けた カール・ノードストゥルム

スウェーデンの画家ノードストゥルムは一時期パリに滞在し、フランスの美術動向から影響を受けた。1880 年代までは印象主義の絵画様式を取り入れ、1890 年代にはクレーゲルらとともにヴァールバリ派に参加し、ゴーギャンの総合主義に傾倒した。
本作は印象主義から影響を受けていた時期の作品。ストックホルムの景観が鮮やかな色味の小さなタッチで描かれている。

民謡を歌う ラリン・パラスケの肖像

フィンランドの画家エーデルフェルトは、同国の民族文化にまつわるモチーフを好んで描いた。本作でモデルを務めるのは、歌い手ラリン・パラスケである。パラスケは『カレワラ』発祥の地と言われるカレリア地方を拠点として、民族叙事詩の歌謡で優れた才能を発揮した。フィンランドの伝統楽器カンテレを弾きながら、歌唱するパラスケの姿が表されている。

アルベルト・エーデルフェルト《ラリン・パラスケの哀歌》1893 年
油彩・カンヴァス　フィンランド国立アテネウム美術館
Photo: Finlands Nationalgalleri / Hannu Pakarinen

エウシェン王子が描く 幻想的な夜の都市景観

スウェーデン王オスカル 2 世の末子であったエウシェン王子は、ナショナル・ロマンティシズムをけん引した画家である。
画中に描かれるのは、王子の邸宅があったストックホルム・ユールゴールデン島からの眺望。煙を吐く近代的な工場地帯が、夜の暗闇の中で人工的な光によって照らし出され、幻想的な姿に変貌している。

エウシェン王子
《工場、ヴァルデマッシュウッデからサルトシュークヴァーン製粉工場の眺め》制作年不詳
油彩・カンヴァス　スウェーデン国立美術館
Photo: Erik Cornelius / Nationalmuseum

西洋美術史に名を刻む北欧の画家たち

近代絵画の巨匠
エドヴァルド・ムンク

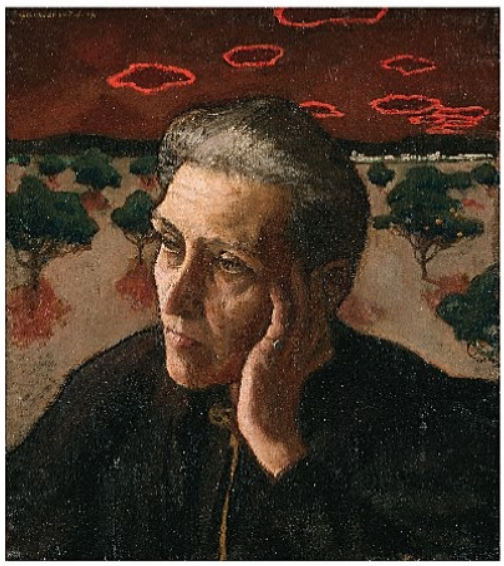
ノルウェー西部にあった画家の邸宅を舞台に、二人の女性がベランダから自然風景を眺める様子が描かれている。鮮やかな色遣いが際立つ本作は、1903 年のパリのアンデパンダン展（前衛派の絵画展）に出品され、後に激しい色彩表現でフランス美術界に革新をもたらすアンリ・マティスによって、絶賛された。

エドヴァルド・ムンク《ベランダにて》1902 年
油彩・カンヴァス　ノルウェー国立美術館
Photo: Nasjonalmuseet/Børre Høstland

フィランドの国民的画家
アクセリ・ガッレン＝カッレラ

パリで研鑽を積んだガッレン ＝ カッレラは当初、写実主義的な表現を用いたが、次第にゴーギャンの総合主義から影響を受けた装飾的な絵画様式に移行した。『カレワラ』を主題とする作品群で名声を確立し、フィンランドの国民的画家としての地位を固めた。
本作は、画家が所有していたコテージで母マティルダが物思いにふける様子を捉えている。写実的な人物描写とは対照的に、背景の木々や赤い雲は様式化され、非現実であるかのような神秘的な雰囲気を生み出している。

アクセリ・ガッレン＝カッレラ《画家の母》1896 年
テンペラ・カンヴァス　スウェーデン国立美術館
Photo: Bodil Beckman / Nationalmuseum



アクセス

電　車　JR 静岡駅北口より地下道を利用して徒歩３分
　　静岡鉄道新静岡駅より徒歩５分

新幹線　東京駅・名古屋駅から東海道新幹線ひかり号で約１時間
　　新大阪駅から東海道新幹線ひかり号で約２時間

　車　　東名静岡 IC より約 15 分
　　※お車でお越しの際は、近隣の駐車場をご利用ください。

空　路　富士山静岡空港より静鉄バス（静岡エアポートライナー）
　　で約１時間

関連イベント

1.講演会「北欧の青い風景画
―エウシェン・ヤンソンを中心に」

日時　2月23日(日祝) 14:00−15:30(開場13:30)
講師　佐藤直樹氏(東京藝術大学 教授)
会場　当館多目的室
参加料　無料
定員　70名(応募多数の場合は抽選)
申込締切 2月6日(木)必着
※申込方法の詳細は当館ホームページをご覧ください。

2月限定
トワイライト
プレゼント企画！
2月の16時以降に
ご観覧の方、

各日先着50名様に
静岡市美術館
オリジナルグッズを
プレゼントします。

2.当館学芸員によるスライドトーク

日時　3月15日(土) 14:00−(40分程度)
会場　当館多目的室
参加料　無料
※申込不要、先着順。当日会場へお越しください。

3.Shizubiシネマアワー vol.34「北欧の女性画家たち」

❶『魂のまなざし』(アンティ・ヨキネン監督／2020年／フィンランド・エストニア／122分)
❷『見えるもの、その先に　ヒルマ・アフ・クリントの世界』
(ハリナ・ディルシュカ監督／2019年／ドイツ／94分)

日時　❶3月8日(土)　❷3月9日(日) いずれも14:00−(開場13:30)
会場　当館多目的室 ※簡易の映像設備での上映になります
参加料　各回500円(チケット制)
※2月4日(火)10:30より当館受付にて販売。
※各回1人2枚まで。定員になり次第販売終了。
定員　各回60名
企画協力 (株)サールナートホール

静岡・音楽館×科学館×美術館 共同事業

4.ミュージアム・コンサート
「ムンクとグリーグ 2人のエドヴァルドと音楽」

日時　3月2日(日) 15:00開演(開場14:30)
会場　当館多目的室
参加料　1,500円(全自由・チケット制)
※1月25日(土)10:30より当館受付にて販売。
※定員になり次第販売終了。 ※未就学児不可。
定員　60名
出演　伊藤春菜氏(ピアノ)
曲目　E.グリーグ:抒情小品集 より、《ペール・ギュント》組曲 より ほか
主催　静岡音楽館AOI、静岡市美術館